
コトコト。

nakoso

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コトコト。

【Nコード】
N7207E

【作者名】
nakoso

【あらすじ】
あなたが好きなものがわたしの好きなもの。

> I n t r o A<

彼が家に来る。

と言っても親にアイサツだとかそういうおかたいもんじゃない。そもそも独り暮らしだから親はいないわけで。

『独り暮らしの女の部屋』という話題がキツカケ。

「じゃあウチくる？」

「行く」

即答で決。

初めて、彼が家に来る。

掃除は完璧、準備は万全。

さあ、どっからでもかかって来い。

> I n t r o B<

彼女の家に行く。

と言っても、同居の許可とか結婚の許可とか仰々しいもんじゃなく。くて。

いつかは行ってみたいもんだけど。

「お父さん！ 娘さんをぼくにください！」

「何を！ 一度言ってみたかった！ 許さん！」

みたいなね、みたいなね。

それはそれとして。

初めて、彼女の家に行く。

なんだかソワソワしてしまう気持ちをどうにか押し込んで。
いや、押し込め切れないんだけど。
ケータイからリダイヤル。

「——もしもし？ うん、駅着いたよ？」

> 彼のコト。 <

メガネ。

寝癖。

背丈は平均的。

き、き、き……気楽な性格がナイス。

す——好きな人。

『駅着いたよ？』

「ちよっと待ってて、今行くから」

ケータイを切って、上着を羽織って。

ストールで首を巻いたら完全防寒。

彼を迎えに、家を飛び出した。

> 彼女のコト。 <

笑顔。

可笑しい時に笑う仕草。

さわるとやわらかい髪。

見た目より中身重視。

し、し、し……

しーしっかり、愛したいと思えた人。

『ちよっと待ってて、今行くから』

「はーい、待ってますー」

切れたケータイをポケットに仕舞い込む。

どんくらいでここに来るんだろう？

タバコ1本くらい吸えるかなーとタバコケースを取り出したところで、眉をしかめる彼女の顔がちらついた。

……やめとこ。

タバコもポケットに仕舞って。

日曜日の昼下がり、ぼくは待つ。

大好きな笑顔が駆け寄ってくる時を。

> 柚子茶のコト。 <

柑橘系の香りを彼は好む。

何の話をして出たのか忘れてしまったけど、冬の寒い朝、彼は柚子茶を飲んで体を温める。

冬季限定の彼の好物。

冷える体を温めてくれる、湯気に混じった柚子の香り。

「いらっしやいませ」

ドアを開いて、お先にどうぞと促す。

「お邪魔しまーす」

遠慮がちというか、恐る恐るというか。

「なんか、怪しい人みたいだよ？」

キョロキョロしながら入る彼の背中、まさに挙動不審者。

「いや意外とキレイなんだなと思ってさ」

「独り暮らしの女の部屋は腐海だったのは、ただの先入観だって」
「認識改めます」

「そうしてください」

「そっかゝ、キレイなもんなのか」

「いいからとっとと入れ」

玄関に留まり続ける彼の尻に蹴りを1発。

「あ、早速DV？」

「いいから」

彼を押し込んでドアを閉めた。

「適当に座ってて。今お茶淹れるから」

「お構いなく」

「いらない？」

「超ほしい、超喉渴いた、超お茶飲みて」

「じゃあ大人しく座ってて。面白いもんじゃないけど」

「ほーい」

手近にあったクッションに腰を落ち着けた彼。

もそもそと上着を脱ぎ始めたのを見て、

「ハンガーあるから適当に掛けといてね」

「ほーい」

返事を聞きながら、あたしの手は湯を沸かす。

ガス台に置いた小ぶりのビンを手にとって振り返っ――

「どわっ！」

「うわっ！」

すぐ目の前に彼がいた。

思わずビンを放ってしまいうくらい。

『びっくりしたあ』

声が重なった。

同時に吹き出した。

「気配消すなよ」

「いきなり振り向くなよ――あれ？」

床に転がったビンが彼の視線を引く。

「ブランドとかよく知らないから、適当に選んだんだけど」

拾い上げたビン。

柚子色のビン。

冬季限定、彼の好物。

「それ、いつも買ってるヤツ」

彼の笑顔が、あたしの好物。

> アールグレイティのコト。 <

柑橘系の香りを彼女は好む。

喫茶店に行けば必ずアールグレイティ。

夏はアイス。

冬はホット。

彼女の喉を潤すのは、いつだって薄く香る柑橘系。

「何か手伝うことある？」

「んー、まずはお湯が沸かないことには」

柚子茶のフタに手を掛ける彼女。

「じゃあ、ちょっと時間あるね」

「うん。だから、待っててっ」

声ごと力む彼女。

「なんか、どっかり座ってるってのもな」

「お客さんが何言ってるの」

彼女の手からビンを取って、代わりに後ろ手に隠していたものを手渡した。

薄くて、丸くて、小さいレコードが入れられるような、アルミの缶。

「え、これ」

「おみやげ」

彼女に対して頑固だったビンのフタをひねる。

かぼつ。

うん、素直でよろしい。

「わざわざ買って来てくれたの？」

「好きだって言ってたでしょ？」

「なんていい人なんだ」

「いいカレシって言って」

アルミの缶に目を輝かせる彼女を見て、内心ほっとした。

彼女の好きな、アールグレイティの缶。

たまにしか買わないと言っていた、ティーショップのアルミ缶。

「ありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそ柚子茶を用意していただきました」

頭を下げ合って、笑い合う。

いつだってぼくを潤す、彼女の笑顔。

ヤカンが湯気に鳴った。

> カレのコト。 <

テーブルに並ぶ2つのティーカップ。

あたしのアールグレイティ。

彼の柚子茶。

小ぶりのテーブル1つ分の距離で交わす談笑。

「もっと、こう、ごちゃごちゃしてると思ってた」

まだ言うかこの男は。

「人によるよ。そういう人もいるだろうし」

「やたらめったらカラフルなカーテンとか」

「うちは2色水玉」

「ぬいぐるみいっぱいとか」

「クッションなら5、6個あるけど」

「アイドルのポスターが、ばーんと」

「好きなアイドルがない」

「下着転がってるとか」

「片したからね」

にやり、彼の唇が歪む。

「転がってたんだ」

「ちゃんと片付けてますう！」

などなど。

ちよつと部屋が暗いなと感じて蛍光灯を付ける。

時計を見上げたら、とつくに夕刻。

「今日はご飯食べてくんでしょ？」

「うん」

喜色満面、子供っぽく笑う彼の笑顔が愛おしい。

ずつとそばにいたいんです。

「晩御飯の支度、するね」

上げたあたしの腰にまるで紐が付いていたみたいに、

「手伝うよ」

彼の腰まで一緒に上がった。

「お客さんでしょっ」

「どっかり座ってるだけ、ってのも何だか手持ちぶたさなんだって」

「手持ち『無沙汰』ね」

「……手持ち『ぶたさ』」

「変なところで負けん気強いよね」

「おじゃまたくし」

「おたまじゃくし」

「とうもろこし」

「とうもろこし」

「えーっと」

「もういいからっ」

彼といると、落ち着く。

性が合ってるんだと思う。

何でもない時間をしようもない話で潰してるだけでも楽しいし、自然に振舞える。

あたしはあなたが好きです、と、自然に振舞える。

好きです。

あなたは、どうですか？

> カノジョのコト。<

彼女と一緒にキッチンに立つ。

さ、何から始めてやろうか。

「今日の晩御飯は何にするんですか？」

「シチューです」

しっかり答えてはくれたものの、マイク代わりにしていたおたまはあっさり没収された。

「ほう、シチューですか」

「はい、シチューですよ」

「ぼくは何を手伝いましょうか」

「じゃあ、応援してください」

フレー。

フレー。

カ・ノ・ジヨ！

「……そういうことじゃないんだよね、ぼくがしたいのは」

「わかってるわかってる。野菜渡すから片っ端から切って」

「片っ端から切って、って」

「ん？」

あまりに極端な物言いに唾然としていると、彼女は早速じゃがいもをぼくに手渡した。

「……何でもないです」

「嫌いなものってあるんだっけ？」

ガス台に鍋を置きながら、斜めにぼくを見上げる、この彼女の角度が好き。

いや、もちろんそれだけが好きってわけじゃないよ。

「嫌いなものはね……えっと……あつと……」

「ないのね」

「そう。ないの」

これまたあつさり話題を切り落とされた。

「ほら、早く野菜切るっ」

「ほいほーい」

まずはじゃがいもの皮を剥きながら。

——じゃあ、好きなものはなに？

頭のどつかで、誰かが尋ねた。

もしもこれが彼女だったなら、ぼくは即座に答えられる。

ぼくはあなたが好きですと、即座に答えられる。

あなたといられて、幸せです。

幸せなんです。

あなたは、どうですか？

「……あ」

「うん？ 指でも切った？」

右手に皮むき機。左手にじゃがいも。

斜めに見上げる彼女を抱きしめる代わりに。

「好きです」

言葉が、出た。

> コトコト。 <

今までのコト。

これからのコト。

笑うコト。

楽しいコト。

平和なコト。

泣くコト。

泣かせるコト。

怒らせるコト。

怒るコト。

ケータイに出なくなるコト。

ケータイを掛けなくなるコト。

少しだけ、気持ちが悪く離れてしまうコト。

それでもやっぱり、2人でいられるコト。

いろんなコトを鍋に放り込んで。

じっくりコトコト煮込み続けて。

時々味見して微調整。

とろとろになったら食べ頃です。

愛を、育もう。

何でもない日々を、2人で過ごして。

2人の愛を、育んでいこう。

不束者ですが、これからもどうぞ、よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7207e/>

コトコト。

2010年10月8日15時19分発行